

勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』

野 地 秀 俊

1

本書の性格は、「まえがき」によれば「東京大学大学院人文科学研究科における日本中世後期を研究対象とするゼミナール、あるいは研究会で、ともに学んだ若い研究者の研究成果をまとめた論文集」というものである。

論文集には、大抵、それを編む要因というか目的が存在するものだが、「若い研究者の研究成果をまとめ」と

いう企画は意外と少なかったのではないだろうか。最近、大学院への進学者が増えてきており研究者を目指す者も少なくない。しかし、それに対する大学側の対応には遅れが目立ち、研究する環境（設備等）や就職の問題

など、若い研究者を取り巻く状況は決して明るいものではないのが現状である。こうした中、いわゆる若手に論文を発表させる場を提供しようとする動きがあることは、そのような機会から遠いところにいる若手にとっても嬉しいことであるし刺激ともなる。まずはこの論文集を企画したという五味文彦氏、新田一郎氏、宇佐見隆之氏の三氏とこれを実現させた山川出版社に敬意を表したい。

さて、本書は次の様な構成になっている。

第一部 紛争処理と地域支配

「由緒」と「施行」

——「將軍親裁」の構造と基盤

新田 一郎

戦国期京都における室町幕府法と訴訟

— 撰銭令と徳政令を中心に

前川祐一郎

村の紛争解決と共有文書

— 文安年間、菅浦・大浦の相論

田中 克行

戦国末期の肥後国竹迫城主合志氏について

鴨川 達夫

第Ⅱ部 もの・銭・あきない

折紙銭と十五世紀の贈与経済

桜井 英治

中世後期における土倉債権の安定性

中島 圭一

中・近世移行期の都市商人と町

及川 亘

木守と問

— 流通・交通業の起源を探る

宇佐見隆之

中世の経師について

末柄 豊

描かれた暖簾、看板、そして井戸

— 初期洛中洛外図屏風の図像

斉藤 研一

第Ⅲ部 村と寺と地域のひとつと

甲賀郡山中氏の高利貸活動と寺社経営

阿部 浩一

村の誕生と在地官途

金子 哲

寺請制以前の地域菩提寺とその檀家

高田 陽介

戦国期一向宗の実像

神田 千里

一応、大きく分けて第Ⅰ部が法制史、政治史の内容、第Ⅱ部が社会史、流通史、第Ⅲ部が村落史というようになっているが、第Ⅰ部の田中・鴨川両論文は第Ⅲ部、第Ⅲ部の阿部論文は第Ⅱ部に含んでもおかしくない内容であるので、本書は主に社会史、流通史と村落史関係の論文で構成されていると言えるであろう。また、時代的にはもちろん室町期、戦国期という中世後期のものばかりであるが、いくつか近世初期まで言及するという中世から近世への移行を意識した論文もある。このようにこの論文集は、内容的にはある程度分野や時代は固まっているが、十四編を収める大部なものである。同世代の研究者の活躍に刺激を受け、書評の執筆を引き受けてしまったものの、これら全ての論文に批評を加えることは、やはり評者の能力を大幅に超えてしまう。そこで、ここでは中・近世移行期研究と筆者の研究している寺院史の観点からいくつかの論文について多少の考えを述べることと責任を果すこととした。

中世の寺院を研究していても興味をそそられ、そして悩まされるのが、中・下級僧や寄人として寺に付随する人々の存在形態の複雑さである。第Ⅱ部に収められている宇佐見・末柄両論文はそのことをさらに痛感させる論文である。

宇佐見論文は、木津（現、京都府相楽郡木津町）の木守の分析と、交通業者として似た職掌を持つ問との比較を通じて流通に携わる人々の実態を明かにしようとしたものである。その結果、木津の木守は初め一般的な木守と同様、敷地の木々の管理をしており、次第に南都の諸寺院の造営のための材木の管理、運搬に携わるようになる。そして、中世後期には船運を中心とした運送を主な職掌とする存在になっていたことを明かにした。一方、問は自然発生的な「渡守」の系譜を引くもので、営業上の特権を求めて興福寺と関係は結ぶものの、元来特定の機構には属さない存在であり、それは、木守が「木屋所」という木を扱う納所において、興福寺などの寺院の

寄人的存在としてその機構に組込まれていたのとは対照的であるとしたのである。つまり、木津の交通業者と言っても二つの異なる起源を持つ集団があったことを明かにし、その多様性を指摘したことに宇佐見論文の意義があると言える。

しかし、同じ職掌を持ちながら木津の木守と問が違う存在であることはわかるのだが、宇佐見氏が提示した興福寺―修理目代―木守職―木津木守という図式と、興福寺―木津御童子田定使―御問―御童子・牛飼という図式には多少疑問が残る。実は、『大乘院寺社雜事記』（以下、『雜事記』と略す）を見てみると、宇佐見氏も例に挙げておられる「禪正院木守慶力法師」は寛正三年二月晦日条では「去廿六日京衆上洛船事、仰御童子二處召進之、但於三川上致緩怠之由之間、昨日定使慶力并徳陣・善陣等付使了」というように、船運に関わることで定使として登場しているのである。また、同じくこの条で定使として出てくる「善陣」も他の条では「龍花院木守善陣法師」（『雜事記』寛正四年八月二十四日条）というように木守であり、また他の条では「力者」とい

う存在でもあるのである（『同』長祿四年十月二十一日条）。さらに、この力者に注目して『雜事記』を見てみると、文明十二年十月九日条に力者善福法師一族の系図があり、その一族からは御童子になる者も出ていることがわかるのである。つまり力者は、木守にも定使にもなり、その一族からは御童子も輩出するのである。^①木守になり得る者は、このように複雑な所屬形態をしているのであり、これを分析、整理しなければ木守の実態はもろろん、木守と間を取り巻く体系的な構図も明かにならないのではないだろうか。宇佐見氏は交通業者としての木守に注目しているとはいえ、商業や流通に関わる人々の複雑な存在形態は既に指摘されているところであり、その「複雑さ」は「中世人」（本書の題では「ちゅうせいびと」と読むらしい）の特徴の一つでもあるのだから、「複雑さ」へのこだわりが中世という時代の特徴も解明することになると思うのである。

一方、末柄論文が扱った経師という職人からもまた「中世人」の多様性を伺うことが出来よう。

まず末柄氏は、過去の経師研究が時代ごとに分断され

て行なわれてきたことを指摘し、通時的に経師を捉らえることから始める。その結果、経師は奈良時代の写経所の写経生に起源を発し、それが衰退すると、料紙の調整、写経、経巻の装丁を一手に請け負う職人集団の統率者となっていく。撰関期になり個人の写経が多くなると、代わって摺経を職掌とするようになり、室町時代に至って摺経・摺暦こそが経師の中心的な職掌になることを明かにするのである。これは、中世の経師が装丁を主な仕事としてきたという従来の説に修正を迫る大変興味深い指摘であろう。

ただ、少し残念なのは、なぜ中世の経師は紙の調整や経巻の装丁ではなく、摺経や摺暦を職掌の中心としたのかということの説明が曖昧な点である。単に、写経の需要が減り摺経の仕事が増えたからだだけのだろうか。末柄氏は経師の多様性を追うあまり、一つ一つの事例をさりと流してしまっている感がある。「したがって中世の経師とは何にもまして摺経を行なう者であり、印刷業者であった。」と結論づけるのであれば、その扱ったものである摺経・摺暦、延いては「摺り物」についてもう

少しこだわってみてもよかったのではないだろうか。なぜ、室町時代になって摺経や摺曆などの「摺り物」の需要が増えるのか。中世、特に室町時代において「摺り物」はどのような意識で見られていたのか。つまりは、それを扱っていた経師への意識へもつながっていくことなのである。

例えば、時宗では「賦算」と称し、「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と摺った念仏札を配ったが、それが一つの行とされている。また、牛玉宝印という一種の守り札も、中世から近世にかけて手書きから摺り物へと変わっている。そして、末柄氏が提示した例では、室町時代には年忌法要の際に摺経を送るという習慣がある。いずれも宗教色の強い例であるが、こうしたことに注目していけば、経師の中には長講堂の承仕としてなど、寺で活動している者がいるという末柄氏の指摘も、より意味のあるものになると思われるのである。

それから、末柄論文ではもう一つ重要な指摘が為されている。それは、中世において多様な職掌を担っていた経師が、近世になり表装や障子貼りだけをするようになる

っていったことである。なぜこのことが重要なのか。人々の存在形態の複雑さが中世の特徴の一つであるということは前に述べた通りである。それが集約、あるいは分散にしろある程度一元化されていく過程こそ、中世から近世への変化であると考えからである。そして、何が変わり何が変わらないのか。それをしっかりと見極め、変わっていったもの、失われていったものの中から中世の姿を見出すことも出来ると思うのである。末柄氏は、経師の職掌の変化が「本屋を中核とする出版業の成立」によって起こったものとした。そのことは確かに変化の側面であろが、摺経が少なくなったことの説明にはならない。やはり、摺経に対する意識の変化を追うことが、経師の実態の変化の社会的要因を探る一つの手段となり得ると考えるのである。

3

これまで、社会史関係の論文2つを取り上げ、要旨と問題点を述べてきたが、2の最後に指摘したように中・近世の移行期という視点に関しては、あまり意識されて

いがないと言わざるを得ない。社会史においても移行期研究が必要なことは後述することにして、その前に、社会史関係の論文の中にもいくつか中・近世の移行期を意識したものがあるので、まずはそれを見ることにする。

例えば、及川論文は、近世史料も駆使し、毛利氏の下で独自に活動していた尾道の豪商渋谷氏が、次第に町に編成されていくことを明かにし、中世的商人が近世的商人へ移行していく様を見事に描き出している。そして、その変化の要因として、毛利氏から福島、浅野氏への領主の交替と近世的町共同体の成立を挙げ、これにより渋谷氏は毛利氏との一対一の関係を維持できず、町に吸収されてしまうのである。こうした及川論文の明快さについては、桜井英治氏の研究による新たな商人像の抽出や、藤木久志氏、そして本書の編者でもある勝俣鎮夫氏などによる移行期村落論の成果に拠るところも多いが、何よりも近世史料を使い、しっかりと近世の実態を分析したことを挙げなければならないだろう。移行期研究としては当たり前のことのようにだが、社会史に関して言えば、あまり実行されていないのが現状なのである。

また、そうした移行期研究の方法論では、斉藤論文が行なっている絵画史料による分析も有効な手段であろう。戦国期から近世初期にかけて描かれた絵巻や屏風絵などには、当時の人々の生き生きとした姿が描かれており、ビジュアル的にその変化の様子を知ることが出来るからである。今回の斉藤論文では、初期洛中洛外図（厩博甲本、東博模本、上杉本、歴博乙本）に描かれている暖簾や看板、そして井戸を比較分析して、諸本の特徴を指摘したものである。特に中・近世移行期を意識してはいない。しかし、第4節の、図像比較によって滑車のある井戸が中世の絵画にはほとんど見えず、近世初期になって多く見え始めることから、滑車の井戸は近世的なものであるという指摘は、移行期研究に絵画分析が有効であることを証明する意味で見事であった。ここから井戸を取り巻く庶民の生活の変化を読み解いていくことも可能になるのである。

だが、絵画史料研究の方法論は確立されているとは言いきれず、問題がないわけではない。例えば、斉藤論文においても、第1節で暖簾の数的分析が行なわれている

が、それは初期洛中洛外図の研究においても、暖簾を通じて当時の商人や職人を捉らえることにおいても、果して、意味のあることなのだろうか。これは何も数的分析が良くないと言っているのではない。絵画史料が写真性に乏しいものである以上、構造的にこの辺りに集中して描かれているというような分析の時には数的分析も有効性を持つと思うが、どの本にはこれだけ描かれていて、こっこの本にはどれくらい描かれていて、という分析には何の発展性も見出せないように思うのである。実際、齊藤氏は第1節の暖簾の数的分析では何等明快な見解を述べていない。一方、次では下立売通りを構造的に分析することによって、上杉本においては貴人の行列を浮き立たすため下立売通りの華やかさを削ったという魅力的な推測を出しているのである。これは、文献による研究と同じで、研究対象、テーマによって方法も吟味しなければならぬという基本的なことである。それさえ厳密にしていれば、絵画史料は扱いにくいものでもなく、移行期研究においても有効に使えるものとなると言える。

以上、本書の内でも社会的なもの四編を選び、批評を加えた。もちろん、他の論文も大変示唆に富んでおり、一読をお薦めするものばかりであるが、この四編にこだわったのは、何よりも社会史における中・近世移行期研究の重要性を主張したかったからである。しかし、実はこの主張は既に網野善彦氏によって行なわれている（一九九四年帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム「中世」から「近世」へ　ちなみに、一九九六年に名著出版から報告書が刊行されている）。網野氏は、まず、文献史学において社会史や民衆生活史などが定着し、成果を上げてきたとしてから、「つまり、人々の生活そのものに即して考えてみますと、この時代区分が必ずしも適当でないと考えられる問題が少なからず出てきた」と指摘しているのである。確かに、『日本の社会史』が刊行されて、既に十年が過ぎようとしている。その間も様々な成果が生み出され、新たな事実が明かになった。しかし、それらは個別のままで評価され、ほとんど体系的

に整理されることはなかったのではないだろうか。そこで、そうした社会史の成果を整理、発展させるための一つの手段として移行期研究を挙げるものが出来ると思われるのである。また、石井進氏も同じシンポジウムで、「(十六世紀末から十七世紀あたり)この辺の大きな転換期の意味を追究してゆくことは、当然それ以前の「中世」と

よばれる時代の性格を逆にあぶり出してゆく結果になるでしょう。」と講演し、移行期研究の重要性を説いている。その具体的な意義は前述したつもりなので繰り返さないが、これで、今後の社会史、延いては日本史学を考える上で移行期研究がもつ意味は判って頂けたと思う。書評を任されたはずが、とんだ方法論の押売りになっ

てしまったことをお許し願いたい。しかし、それも本書を読んでのことであり、それだけ刺激的であったことは間違いない。そして、若い研究者にはそうした刺激が必要であり、本書は、その良いカンフル剤となるであろう。

註

- (1) 木守と力者の関係については、菊池啓子「中世の力者に関する一考察―『大乘院寺社雑事記』を中心に―」(武蔵大学人文学部日本文化学科一九九二年度卒業論文)を参考にした。この他の力者に関する研究論文は、管見の限りでは、瀧口学「中世興福寺の「力者」について―『大乘院寺社雑事記』を中心として―」(1)、『鹿児島中世史研究会報』第四八号 一九九三、六)、「同」(2)、『同』第四九号 一九九四、六)、「同」(3)、『同』第五〇号 一九九五)がある。